地域社会

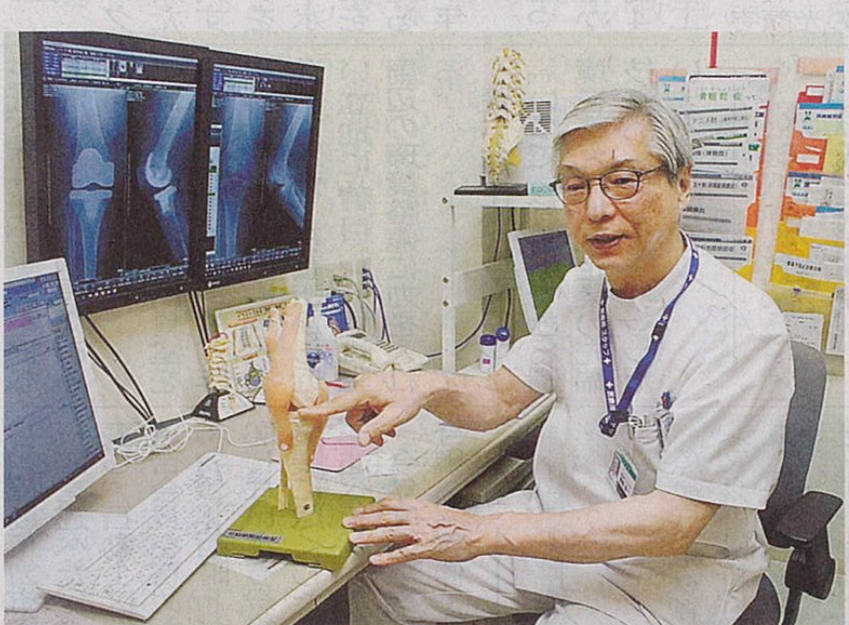
人工膝関節「最善な診療を」

手術数北陸一の金粕氏

高岡整志会病院 副院長に就任

膝が変形して痛みを感じる患者に人工膝関節を取り付ける手術を専門とする整形外科医の金粕浩一氏（65）が、高岡市の高岡整志会病院副院長に就任した。金粕副院長は近年、同手術を北陸トップの毎年200件近く執刀しており、独自の検査法やリハビリも開発して全国的に高い知名度を誇る。「少しでも多くのお年寄りの健康寿命を延ばしたい」と意欲を見せる。

人工膝関節を取り付ける手術は、加齢に伴い膝の軟骨がすり減って変形し、強い痛みを感じる高齢者らが主な対象となる。膝の皿の部分を12センチほど切開し、骨の表面を削った上で人工膝関節を固定する。手術時間は片方の膝の場合で約1時間40分。全国で年間8万件ほど行われている。



人工膝関節手術の説明をする金粕副院長＝高岡市の高岡整志会病院

手術は事前の準備が大切になる。固定後に人工膝関節がスムーズに動くよう、術前に骨を削る範囲や角度をミリ単位で決める。金粕副院長が開発した術前の検査は、いすに座って直角に曲げた膝の裏側からX線を当て、ちょうどいい骨の削り方を割り出す。この検査法は「カネカスビュー」と呼ばれ、世界に広がった。

金粕副院長はリハビリにも力を入れている。術後も術前と変わらないスピードで歩くには、手術翌日から体重をかけて歩くことが重要なためだ。こうした歩行や椅子から立ち上がるといったリハビリをした患者は筋力の回復が早く、入院期間を従来より1週間縮め、2週間程度で退院できるケースが多いという。

金粕副院長は、患者を旅行やゴルフを楽しめる状態に戻すことが健康寿命の延伸につながるとし、「患者さんの目標をかなえられるよう最善の診療をしたい」と決意している。